
とある異世界からの転生者

カッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある異世界からの転生者

【Nコード】

N3371V

【作者名】

カッシー

【あらすじ】

俺はなぜか死んでしまつてそれが神様の手違いというテンプレな転生をしてしまった！しかもその世界はとあるシリーズの世界！第二の人生幸せに生きてやるぜ！

転生？（前書き）

始めてしまった……いったい何回小説を始めたら気が済むんだ！自分

転生？

「あれ？」

気がついたら何もない空間にいた。あれ？俺って飯食ってたんじゃないの？そんな事を考えていると急に光の玉が現れた

「何だこれは？」

「わしは神じゃよ」

いきなり突拍子もない事を言い出す自称神

「何でそんな丸い玉何だ？」

「お主達に神は見えないからな、こうやって見える形にしとるんじやよ」

「証拠は？」

「証拠？」

「その通り、心を読むだの何だの不思議な力を見せてくれ
いきなり神なんて信じられん

「いきなり神なんて信じられん」

「何言い出すんだ急に！」

「お主が思った事をそのまま言っただけじゃよ」

「すげえな神様、心を読むなんて。これじゃ信じるしかない」

「凄いじゃろ」

「もう心読むのはやめてくれ」

「分かった」

これ以上心を読まれると結構精神的に痛い

「で、神様とやら。平凡な少年になんかよつか？」

「うむ、まずお主は死んでしまった」

「は？」

「どづいう事だ？」

「いや、最近手違いが多くてな。間違えてお主の寿命は……」

「0になってしまったという事が……で、死因は？」

「死因は……餅を喉につまらせて死んだ」

「は？それって……」

「ちょっと待て、それって凄く情けない死に方じゃないのか？」

「だからお主を転生させる」

「転生？」

「うむ、学園都市のある世界に能力付きで」

「学園都市……という事はとあるシリーズの世界か……」

とあるシリーズの世界って言えば……

「知っているのなら話が速い。そこに転生してもらおう」

「分かった、ならいい。ホントならどうしようかと思ったが、転生するなら別にいいか……で、能力は？」

「能力は何でもいいぞ」

何でもいいか……これは迷うな。ならば……

「ドラゴンボールのサイヤ人の力はどうだ？」

サイヤ人の力は俺から見たらチートにしか見えないからな

「サイヤ人か……いいんじゃないのか？」

「地球人だけどスーパーサイヤ人2までなれる」

「なんで3までいかないんじや？」

「あそこまで髪を長くしたくない」

あの髪は長すぎて俺はあまり好きじゃない

「では、悟空の全ての能力が使えるって事でいいんじゃない？」

「あと、一方通行にはこの能力ってか俺の攻撃が効くという事にしていてくれ」

さすがにあいつには勝てないからなこうしておかないと

「了解した、では行くのじゃ」

「ちょっと待て！柵川中学二年にしてくれよ。あと日付は超電磁砲の始まる三日前な」

「分かった、分かった。早く目を瞑れ」

そう言って目を瞑ると意識が遠のいて行く。――新しい人生の始まりだ。

転生？（後書き）

感想などよろしくお願いします

転生成功

うつすらと目を開ける。そこには知らない天井が

「言わないぞ、僕は言わない」

と言って、言いたい言葉を必死に抑え込み。リビングまで行くと

「あっそっか、俺転生したんだった」

ということ昨日のアレは夢じゃなかったのか

「あれ？」

一枚の手紙がテーブルにある

「なんだろうっ？」

広げてみるとこんな事が書いてあった

『神からこの手紙を読む人間へ』

この手紙を読んでもという事は転生成功したんじゃない。良かった良かった。さて、本題に入るがお前の力の名前は「肉体操作」でレベルは1じゃ。まあ表向きだけだがな。実際の力はほとんど悟空と同じ。だが力が持つのは三十分しかもスーパーサイヤ人状態だと十五分しか持たない。回復には三時間必要じゃ。まあこの三時間は全部エネルギーが切れるまで使ったらという場合だがな。まあそれでも結構チートだと思うがな。そしてお前の名前は神崎翼だ。そして今

日は超電磁砲放送の三日前今日から柵川中学校の生徒じゃ、まあそれくらいじゃな。では頑張ってくれ

神より』

読み終わった後、手紙を置く

「試しにスーパーサイヤ人になってみるか」

そう言つて少し集中すると髪が金色になり力が湧いて来るような感じがしたが

「くっ！」

すぐに解く。めちゃくちゃ負担がかかってきた

「スーパーサイヤ人はもうちょっと後にしておくか」

たった数秒で汗がダラダラと出る。こりゃ大変だ

「あれ？そういえば俺って転校生……」

とけいを指す時刻はとっても危険な時刻を指していた

「やばっ！遅刻遅刻！！」

すぐさま冷蔵庫にあったパンを取って加えながらダッシュした

「ふう……」

ギリギリ間に合ったー！瞬間移動がなければ死んでた！

近くの路地裏に瞬間移動して静かに柵川中学校と掲げた看板を見ながら職員室で、担任の先生と会って笑顔で挨拶して教室の前で待っているという声が聞こえる

「今日は転校生が来た！！」

その先生の言葉で教室はざわつき始める

「さあ入ってこい」

その言葉に反応して俺が扉を開け、教室に入って自己紹介をした

「えーと今日初めて学園都市に来ました神崎翼と言います！」

翼、という言葉に首を傾げる生徒たちそして俺の次の一言で

「性別は男です」

「え！女じゃないの？」

俺が言った瞬間数人からそんな言葉が放たれる。何故だ？

「俺は男だけど……何で？」

その何で？の一言に殆どのクラスメートが言った

「……………女にしか見えないから！」「……………」

「……………へ？」

そう、クラスメートの言うとおり俺は「男の娘」となる存在になっ
てしまっていたのだ

俺は男だああああ！！！！

俺が男だと知って驚いているクラスメート達。あ、先生もですか？
そこで言いたいのが……

生徒の性別ぐらい知つとけえええええ！！！！

だ。先生がなっさけねえーなー！！！！

「それで、神崎君の席はあその花飾りの人の横の席ね」

「はい」

どうやら俺は初春とかと同じクラスらしい。だって花飾りの人とい
つたら初春しか思いつかないだろ！

そう思いながら先生の指した方向を見るとやはり初春の姿が。視線
が集まっている事に気づきながらも初春の机の横へと歩く

「これからよろしく。俺は神崎翼だ。決して女ではない」

「へ？私は初春飾利と言います」

急に話しかけてきた事にちよつと驚いたらしい

「私は佐天涙子よろしく！」

今度は前の席にすわっていた佐天が話しかけてきた

「よろしく」

佐天と初春とコミュニケーションをとった所で、ホームルーム終了。その瞬間俺の周りにはクラスメートが集まった。どうやらよくある転校生に質問みたいな感じらしい。

だが、そのほとんどの質問が……

「何でそんな女っぽいんだ！」

という質問だ。いや、この質問には知らねえよとしか答える事が出来ない。後で佐天に手鏡を貸してもらったところ前世の俺とはかけ離れた顔だった。前世では普通の中の普通としかいいようがなかった顔と髪型だったのに。しかも髪型が茶色っぽく何より女の子っぽい髪型だった。自分でも見ててあっ、可愛いなんて思ったほどだ。一応言っておくが俺はナルシストではない！

「ありがとう。手鏡返す」

佐天に手鏡を返す

「どういたしまして。ところで何で手鏡を借りたの？」

「いや、そりゃああれだよ。うん。あははは」

笑って誤魔化そうとしたが

「も……もしかしてナルシストとか」

「え？」

その初春の一言に佐天が一步引こうとするが

「いやいやいやちょっとまって！俺は決してナルシストなんかじゃない！」

「あ？そうなの？じゃあよかったー」

何だその疑問符は、と思ったが言うのが面倒だったので言わなかった。

そのあと、てきとうに手鏡の事を誤魔化して黙らせて、俺は初日から寝るといふ行為に励んだ

えーあいえむなんとかの話聞き流して何時の間にか放課後。面倒くさそうに帰る準備をしていると

「神崎君、君は能力検査があるから帰らないようにね」

その一言で俺の放課後のスケジュールはギッシリ詰まってしまった

「はあー」

ため息をつきながら脳検査をする場所に移動する

「皆さんも神崎君の能力が知りたかったら見学自由です」

先生のその声に大半のクラスメートがついてきた。俺ってレベル1だぞ！まあ表向きだけど、あーどうすりゃいいんだよ！

そうして校庭まで出た。何でよりによって校庭なんだよ！あーもう！他の人の視線が！！！！

【貴方は筋肉操作系ですね。では、そこに握力計があります。力を最大限に使って握ってください】

そんな声も聞こえずただ力をセーブするんだ！と考えている自分。そして握力計を持った。

【では、検査を開始してください】

機械の音に気づきちよこつとだけ力を入れる

【検査終了です。握力計を置いてください】

気づいたら、終わっていた能力検査。あれ？何やったんだっけ？

【検査結果集計中………集計完了しました。握力右50kg左49kg上昇筋力右6kg左5kg総合結果レベル1】

レベル1という事にホツとする俺。皆は俺の事を面白くなさそうに見ている。

「測定お疲れ！帰っていいよ」

担任の先生ではないがその声が聞こえたので今度こそ帰る準備をする。その時

「おーい神崎さーん」

初春の声がしたので振り返る。するとそこには初春と佐天が立っていた。

「よかったじゃん！私なんてレベル0だよー超能力があるからいいよ。私なんてないからさー」

「そうですよ！私なんて役にも立たない能力何ですから、それに比べて貴方はぜったいに使える方です！」

どうやら俺は悲しそうにしていたと勘違いされたいらしい。え？何で？と思ってるよ

「さあやけ食いしようじゃないか！」

「え？」

突然の佐天の発言に驚く俺

「さあパフェ食いに行きましょう！」

「え？え？」

ハテナマークが俺の頭の中に無数に浮かび上がる。何故に？

「レッツゴー」

「あ！ちよっ…待っ」

連れていかれる俺、何だよこのパターンってかお前ら…

俺をだしにしてパフェ食べてえーだけだろ！！！！！！

俺は男だあああああ！！！！！（後書き）

御坂や白井の活躍はまだまだですね

ファミレスと学園都市見学

予想以上に早く終わった能力検査。と、思ったら佐天と初春に連れて行かれて……

「何で俺がファミレスにいるんだ……」

俺はファミレスで初春達と共にパフェを食べていたのだ。いや、もう成り行きが成り行きすぎて訳分からん。

「いいじゃないですかー。こうやって親睦を深められるし。パフェも食べられるし！そうですよね、佐天さん」

「そうだよーほら、遠慮しないで食べて食べて！」

「それで、金払うのは？」

「「神崎」さん！」

声を揃えながら言う初春達にため息をつく

「まあいいか、しょうがねえな」

いや、大丈夫じゃないから！精神的に全然大丈夫じゃないから！！
(これ本音)

「ところで何で神崎さんはこんな夏休みが終わる中途半端な時期に転校して来たんですか？」

いきなりそんな事を佐天が言い出しやがった

「いや、大丈夫だよ。俺も一人で見た方が気楽だし……」

「ダメですよ！今回は私達親睦を深めるんですから」

「そっだよ、遠慮なんかしないでいいよ！」

いや、全くしてない！と言おうとしたがやめた

「ってな訳でレッツゴー」

「ちよっ！まっ……」

何かデジャヴ……

「ここが美味しいケーキ屋さんです!」

「このレアチーズケーキは絶品だよ!」

強制的にファミレスでおごる事になり、学園都市の街案内をしてくれると言ったのだが……

ケーキ屋とかそんな事ばかりじゃねーか!!!

「佐天」

「何?神崎」

「まさか俺の事女だと思ってんじゃねーだろーな!」

ケーキなどに没頭中の初春は放っておいて佐天を呼び(佐天も没頭してたが)俺が男だと思ってるか確認すると

「へ?う……うん!大丈夫だよ。忘れてる訳ないじゃん!」

顔から汗が出てますよ佐天さん

これって……泣いてもいいレベルだよな!そうだよな!

そんな事を考えている俺には気づかず佐天は初春に近づき何かを話している。そして初春がはっとした顔になって言った……いや、言ってしまった

「そういえば神崎さんって男だったんですね！」

その時、俺のガラスのハートはバリンと砕け散った。流石テレビでの中の人は天然ギターっ子をやってるだけあって凄い。俺のハートはもう……ポケモンで言ったら瀕死状態。ポケモンセンターのないこの学園都市でどう生きればいいんだ！

その後、初春がはっとしてゴメンなさいとか言ってたが、最早ハートが砕け散った俺には最早聞こえてなかった

ファミレスと学園都市見学（後書き）

御坂と白井を早く活躍させたいなー是非上条さんも出したい！是非感想など下さい！

自動販売機での上条さんと人助け（前書き）

上条さんを……出せたぞー！ー！！！！！！

自動販売機での上条さんと人助け

俺はハートを取り戻した後、初春と佐天と別れ、本格的に学園都市を散歩していると

「あれっ？あーれー？」

とか言つて自動販売機を探っている一人の少年……いや、俺よりも年上だけどね？まあツンツン頭をした不幸そうな少年が立ちすくんでいた

「どうしたんですか？」

分かつて質問する。そして顔を上げた少年は……

「いや、お金が吞まれちゃってな」

上条当麻だった。よし！やっと主人公に会えたぜ！長いようで短い主人公探し？はここで終了する

「いくら？」

「二千円……」

「え？それって……二千円札？」

無言で頷く上条さん。そして一つ分かった事がある

上条さんは自業自得で不幸になる事がある。という事を

「いや、それは単なるバカとしか言いようがないですよ!」

「う、通りすがりのボーイッシュな少女に言われるとは……上条さんは悲しいですよ」

「ちょっと待て。今なんだった?」

上条さんの言葉が俺に何かのスイッチを点けた

「え?通りすがりのボーイッシュな少女って……」

「俺は少女じゃねえ!正真正銘の男だ!」

「え?マジで?いや、やっぱり上条さんの近くに少女が寄ってきたと思ったら男だったか……はぁー不幸だ」

俺の方が不幸だ。と、心の中で呟く俺。だっってお前はすんげえモテモテ野郎じゃねえか!正直羨ましすぎるんだよ!と、高校生だったら言ってたが、あいにく中学生なので言わないでおく。しかもそれは不幸でも何でもない!

「しっかしお前が男か……名前は?」

「俺は神崎翼だ」

やや上条さんは男という事を認めていないらしい。認める。ってか認めてくれ……!」

「俺は上条当麻。ここで会ったのも何かの縁かもな」

そう言って手を出す上条さん

「よろしく。ところで不幸な上条さんに一つアドバイスを」

手を握り離れた後、親睦という事でヒントを言おうとする

「何だ？ってか何で俺が不幸な事知ってたんだよ？」

「誰でも自動販売機に二千円札呑み込まれた少年がいたら百人中百人がバカか不幸な奴って答えるだろーな」

「そうか……そうだな……それで、アドバイスって？」

ため息をつきながら、アドバイスを聞こうとする上条さんに答えた

「魔術師に気をつける」

「は？魔術師？」

「俺が言えるのはここまでだな。後は上条さん次第。また、いつか会えたら」

そう言って自動販売機と上条さんから離れようとする

「あ、ああじゃあな」

戸惑いながらもサヨナラを言ってくれた上条さん。いや〜会えてよかった〜

そんな事を思いながらついに自動販売機から離れた

それから帰ろうとした途中、路地裏に不良達えーと武装集^{スキルアウト}団だった
っけ。漢字で書いたら武装した僧^僧って感じだな。ってかそう思っ
てるの俺だけか？！

何てどうでもいい事を考えていると、無視するだけではいけなかつ
た。何故かと言う

「初春達か……」

絡まれていたのは初春達だった、ちくしょう！たむろっているだけ

「思ってたのに……」

無視する訳にも行かない。しょうがねえな。もともと言えば、俺がこの学園都市に来てあいつらと遊んだのがいけないしな

「よっ」

「ああ！何だコラ！」

「おいおい、また女が来たぜ」

不良達が一斉にこっちに向く

「「神崎」さん！」

初春と佐天もこちらを向く

「やれやれ、モテる男は辛いね」

そう言いながら不良達を見る。二十人程か

「ああ！てめえは男か！じゃあ来るな！今からこいつらといい事しようとしてんだよ！」

「そうはいかねえ俺はあいつらの友達だからな邪魔だ」

「おい、ふざけんのもいい加減に……グフツ！」

「邪魔だつてんだろ！……！」

一人の不良の腹を殴る。そいつは……気絶した

「てめえ……おい、殺るぞ」

一人のリーダー的な人物の声に二十人程の不良は動き出す。一斉に動き出すゾンビかてめえらは

「神崎さん！早く逃げてください！」

初春の声が聞こえる

「悪いな初春、だが風紀委員ジャッジメントの名が廃れるぞ」

「やっちまえ！」

どこの昔の不良だと思いつつながら俺はため息をつく

「さあ不良共。お前らには……」

上条さんより不幸がお似合いだ」

数秒後、残ってるのは一人の少年と二人の少女だけだった

風紀委員に連行

俺はボロボロになったため雑巾みたいな不良達をみて思った

やべえ……調子に乗りすぎた

スーパーサイヤ人2になった時の悟飯以上に調子に乗っちゃったかも。テヘッ！

「おい、大丈夫か？佐天、初春」

そんな事は置いてまずは佐天と初春の安全を確認しなきゃな

「大丈夫」

「大丈夫です」

と言って二人共立ち上がる。良かった良かった

「早くここから離れよう。早くしなきゃシャツジメント風紀委員が……」

「シャツジメント風紀委員ですの！どうかお縄に……ってあれ？」

「来るぞ……」

最早手遅れ、そこにはツインテールのオセロさんが立っていた

It over……

「何で初春がいるんですの？そしてこのお二方は？」

「あ？白井さん！神崎さんが助けてくれたんですよ！」

「神崎さん？」

その問いかけに俺は佐天を指差し、佐天と初春は俺を指さした

何度でも言っ^てやるぜIt over……

「ハア」

深くため息をつく。学園都市に来て一日目に不良達と戦い、^{ジャッジメ}風紀委員^{ント}に連行されるってどんな少年なんだよ、俺は

つてな訳でただいま俺は風紀委員ジャッジメントの白井と初春に連行されている。佐天は頑張ってとか言ってた。それがお前の処女を守った命の恩人に対する言葉か！

「初春、風紀委員でありながら風紀委員では無い人間に守ってもらうとは、風紀委員の名が廃れますわよ」

「ゴメンなさい白井さん」

さつきから初春は白黒さんに謝ってる。白黒は始末書とか何とか、風紀委員も大変だな

「ところでしろく……いや、しら……風紀委員さんは俺に何がしたいんだ？」

あぶねえー間違えたとはいえしろくって言いそうになったあと、白井とまだ聞いてない本名を言いそうになり、やっと風紀委員って言えた。何なんだよこの間違え方

「あ、自己紹介が遅れました。私は白井黒子と申します。貴方は？」

「俺は神崎翼だ」

「翼……男っばい名前ですね」

「俺は男ですよ白井さん」

精一杯理性を保つての一言。もし殴りかかったとしても空間移動レポートで避けられるからな。いや、俺は瞬間移動で……って何考えてんだ俺は

「そつでしたの?」

「ああ、よく……ってか絶対に間違えられますから」

「神崎さんは私達と同じ柵川中学に転入して来たんですよ!」

「そつでしたの」

「正確に言えば、学園都市に来て一日目だけだな」

そつ言ったら、白井が驚愕の表情に変わった

「何でこんな中途半端……いや、それ以前に何故こんな遅く来たんですの?」

「うーん、家庭の事情だな」

そつ適当にごまかす。その答えにそつでしたの。と白井は言った

「では事情聴取を行いますの」

その後、色々な事を話していると何時の間にか風紀委員第177支部に到着。初春が始末書を書くのを暖かい目でみながら事情聴取が始まった

「書庫^{バンク}で調べた所、貴方様の能力は筋肉系の能力らしいですわね」

「その通りだが」

「で、レベルは1」

「ああ」

パソコンを見ながら話す白井。俺の顔写真なんて何所で手に入れやがったんだよ

「それであるの二十人ほどの不良達を倒せたんですの？」

「その通りだ」

いつもと変わらぬ顔で言った。少しでも慌てると疑われる

「初春から聞いた所一瞬の内に気絶させた。と、聞いたんですが」

「修行すれば誰だって出来る様になるさ」

「人間技じゃないですの」

当たり前だ、人間技じゃないし

その後も色々な事を質問され、それも適当に流し、ただ、人間技じゃない事が出来る中学生という印象がついてしまった

「それでは」

「ああ、早く寝たい。今日はマジで早く寝たい」

と言って帰ろうとすると……

「あの、神崎さん」

「何だ？」

「出来れば風紀委員に入ってもらえないでしょうか」

唐突な白井の発言！

「風紀委員……か、なんでだ？」

「貴方様なら戦力などで大変助かりますし。第177支部では結構人不足なんですの」

「考えておくよ」

「ありがとうございます」

そう言った後、風紀委員を後にした。因みに初春はというと……

「白井さん！もう勘弁してください！」

「まだまだですの。ほら、もうちょっとですよ」

「神崎さん……！」

初春……頑張ってくれ

お礼と風紀委員に入る

「昨日はありがとうございました！」

この世界に来て二日目教室に入った途端、初春にお礼をされた

「え？あ、うん」

「私が早く白井さん達を呼んでればこんな事にならなかったのに…
…ホントごめんなさい！」

何かよく分からないが、多分昨日助けてもらった事だろう

「大丈夫、大丈夫！俺はどうって事ないさ」

風紀委員での件ではどうって事なくないけど

「ホントですか？ありがとうございます！」

そう言っただけでまた頭を下げられる。人の視線が痛い

「なつ初春、こんな所でお辞儀されると俺が困るから。ね」

一生懸命初春のお辞儀を止めようとする俺。暫くしてやっと止まってくれた

「昨日はゴメン」

やっと終わったと思ったなら今度は佐天からお辞儀をされた

「いや、もう大丈夫だから！頼むよホント、俺は周囲の視線がね！ほら！痛いんですよ！」

必死に佐天を止める。佐天はそれに素直に従ってくれた。初春、お前も頼むぞ

「ところで神崎さん。何でレベル1なのにあんな強かったんですか？」

この質問が来たか！

「いや、ねえ。もともと喧嘩は強かった方だから」

適当に嘘をつきごまかす。ホントは能力使ったんだけどね

「いや、でも普通あんな強くないでしょ」

「え？あははは人には知ってはいけねえ情報もあるんだよ。佐天君」
もう知らないふりをしまくる俺、いつかバレるような気がするの
は俺だけか……？

「ところで初春」

話題を変えようと必死になる自分

「はい？何でしょう？」

「俺、風紀委員に所属するわ」

「てな訳でよろしく願いします」

「よろしくですの」

放課後、風紀委員に入った事を確認するため風紀委員第177支部に初春と一緒にいった。佐天は用事があつて来れないらしい

「白井さん、固法先輩は？」

「今日は休みらしいですの。全く、おかげで仕事がたくさんあるんですの」

「そりゃあ頑張ってくれ」

俺がそう言つと、白井が

「何言ってるんですの？神崎さんも働いてくださいな」

「え？マジで」

「マジですの」

「えーじゃあ初春に……」

「ダメですよ。風紀委員たるもの怠けては」

俺はこの時、何でこいつは御坂の前だと変態になるんだ？という疑問を抱いた！

「りょーかい。じゃあ教えてくれ」

「了解ですよ」

そう言っつて書類の片付け方を教えてもらって、その後自分で書類を片付けたがリズムカルに行く結構ハイテンションになって、少し調子に乗るったら白井と初春に注意された

てな訳でもう帰る時間！

「では帰り道はお気をつけて」

「初春としろく……白井はどうすんだ？」

また間違えそうになった。以後気をつけます（全く反省してない）

「私達はまだやる事があるのでここに残ります。貴方にもやってもらいたいところですけど、初めてですから、ここまででいいですよ」

「そうかい」

「では、また明日」

と言ってドアを閉める。風紀委員一日目が終わった。平和だったな
てな感じで帰ろうとするが……

「おい嬢ちゃん！俺達と一緒に遊ばない？」

スキルアウト
武装集団に絡まれた。こっからじゃ見えないがもう一人絡まれてい
る奴がいるらしい。全くにもって迷惑な話なので……

「邪魔だ！そして俺は男だ！」

そう言っ腹を殴る。それが相手にジャストフィットして……

「うわ！」

吹っ飛んで行った

「あれ？やり過ぎちゃったかな？」

「ああ？俺達の仲間になにしてんの？」

不良のリーダー的な人がこちらに声をかけて来やがった

「いくら女でも容赦「死ね」ウワァー！」

もう怒った。こいつらアンチスキル全員警備員に放り込んでやる！

と、そんな時

「ちょっと待ちなさい！」

残って絡んでた奴が電撃にやられる。ん……電撃？

「私と戦いなさいよ」

俺が警備員に放り込む前に倒れて行く武装集団アンチスキルしかも電撃で

「ま……まさか」

そこには常盤台の電撃姫が立っていやがった！

電撃姫「ビリビリ女」御坂美琴

「あんだ私の電撃が効かないってどういう体してんのよ!」

「知らねえよ!」

ただいま不良……ではなくどこぞのビリビリ女に追われています!
まあいわゆるリアル鬼ごっこって奴?

「無視してんじゃないわよ!」

「無視してねえよ!俺は逃げてるだけだ!」

「そついつのを逃げてるって言つたのよ!」

そついつってビリビリの電撃を放ってくる

「助けてくれー!」

「しかも女子なのに!」

「女子……」

俺は立ち止まる

「きゃっ!いきなり止まらないでよ!」

「俺は男だ!」

「え？男なの？」

こいつも警備員アンチスキルに放り込んでやるつか……？

「罰としてここでサヨナラだじゃあね〜」

「え？ちよっ！待ちなさいよ！男なら尚更だわ！私と勝負しなさい
」！

「しない。つてかしたくない」

「何ですって……」

「はいはい。つてな訳でじゃあね〜」

そう言つて今度こそ立ち去ろうとする

「はい」

手を掴んで来やがった

「何でしょうつか？」

「少しでも動かしてみなさい。電撃を放つわよ！」

くっ……これじゃあ動けねえ判断力は流石だな。ビリビリ女め！

「分かった分かった。やってやるから。しょうがねえな」

「そう、ならいいわ」

そう言って手を離してくれた。嬉しい限りだ

「お前、名前は」

「私は御坂美琴。アンタは？」

「俺は神崎翼。風紀委員でレベル1だ」

「レベル1！？何で私の力が遮られたのに！」

驚愕をあらわにする電撃姫

「知らんがな」

「まあいいわ。とにかく勝負よ！」

そう言って広い原っぱに移動する。最初にビリビリ女が不幸少年と戦ったところだ

「行くわよ！」

「ふっふっふ。俺に勝てるかな？」

「調子乗ってんじゃ……ないわよ！」

電撃を放ってくる御坂。それを避ける俺。

「ほれほれ。電気が止まって見えるぜ」

「なっ！じゃあこれはどう？」

砂の下の砂鉄を棒状の武器に変える

「触れるとちよつと血が出るかもね！」

「絶対にちよつとどころじゃねえ！」

砂鉄の武器を振り回す御坂。それを華麗に避ける俺

「何で攻撃してこないの？」

「女を攻撃するのは俺の趣味じゃない」

「くっ！女顔のくせになにいつてんの！」

「女顔なだけで女じゃねえ！」

そう言つと俺は瞬間移動して御坂の後ろに移動する

「後ろががらあきだぜ」

「なっ！空間移動！」
テレポート

そして御坂の肩を掴む

「ひっ！」

俺が拳を振り上げただけで悲鳴を上げる御坂。すつごく可哀想に見える

なので……

「グッ！さっき御坂にやられた電撃が！やられた」

やられた振り。当然俺は上条と御坂が戦ったときにこれと同じ事をしたのを俺は覚えてない。ふっ！我ながら素晴らしい演技力だな。そう思った矢先

「ふざけてんじゃないわよ！」

と言って蹴られた。痛い

「はい、俺の負けだ。なので終わりじゃーねー」

「こんな戦い認めるわけかないでしょーが……！」

そう言って電撃を浴びるところをギリギリ避ける

その後、深夜まで追いかけられたとさ

電撃姫〃ビリビリ女〃御坂美琴（後書き）

最後は締めきがないと思う。自分が書いていながら

お……俺の家がああああああ！

ある晴れた日の午後。というか原作来てから三日目。事件は起きた。初春達と共に会話してその会話が日常になりつつある日俺は家へ帰って来た常盤。正確には寮の前でおれは漠然とした

「寮が……燃えてる……」

そう、寮が燃えていたのだ。近くに犯人がいる。まだ警備員アンチスキルが来ないという事はまだ火事が起こって短いと思うしなにしろこの学園都市が火事なんて起こす筈がない

「許さねえパイロキネシスト発火能力者か？レベルアップ幻想御手でも使ったのかよ？なんにしろジャッジメント風紀委員関係無しに絶対殺す！」

その時俺の前に不意に人影が現れる

「てめえ俺が燃やした所見たな……？」

「ああ？」

大柄な男が現れる

「俺がこの寮を燃やした所を見たかと聞いてるんだ！」

「てめえ。誰に向かって口聞いてんのか分かってんのか？」

「は？」

「風紀委員だ。てめえを拘束……いや、半殺しだ！」

「何言つてやがる？俺を……舐めんグフツ！」
腹を思いつきり殴る

「界王拳だ……そのまま寝ていやがれ」

「一件落着……じゃねーよおい！この寮どうしてくれんだよ！」

「風紀委員ですの！ってあれ？神崎さん」

「白井か……」

「どうしたんですの？元気ないですわね」

と、心配そうに尋ねて来てくれた

「当たり前だ。あの燃えてる寮……俺の寮なんだよ」

「そうなんですの？それはお気の毒に」

「おいおい、同僚に対してそれはないだろ。普通ならもっと心配してもよかる所に」

そう言つと白井は

「そつとは言つても……」

そりゃそつだ

「とにかく頑張ってくださいですの神崎さん！」

「ありがとう白井」

そんな事言ってるやっつと警備員アンチスキルが来てくれてこのクソ野郎を連れてってくれた、今日は俺の家を探すから支部にはちょっと遅れると、白井にいつて別れた

「見つからねえな」

なかなかこれと言った寮がなくあっても学区外かもう入れません状態。これじゃああの不幸な人に……あれ？不幸な人……不幸な人……そうか！その手があったか！

そう言つてとある寮に走つた

走ること十五分。とある人物が住んでいる寮に来ていた

ピンポン

インターホンを押す

『はい、上条です』

無気力な声が聞こえる。そう、頼るといふのはこの人！上条当麻さんだったのだ！

「ああ、上条さん？この前自動販売機で出会つた神崎だけど」

『ああ、神崎か。何で俺の家を知ってるんだ？』

「まあそんな事いいじゃないですかとにかく上がらせてください」

『？分かった。ちょっと待ってる』

そう言つと暫くしてドアが開いた

「よお二日ぶりか？」

「うーんとそうですね」

そう言った後、上条さんの寮に入って座る

「お願いがあります」

「何だ？今の上条さんは機嫌がいいから大抵の事はお任せあれ！」

「じゃあ単刀直入に言います。居候させてください！」

その時、上条さんの目が点になつた事を確認した

「？何言ってるんですか神崎さん？ドツキリとかは……」

「ドツキリじゃないです！頼れる人がいないのもう上条さんしかいないんです！お願いします！」

「何でだ？」

上条さん。現在の目も点になつてる

「実は僕の寮が発火能力者バイロキネシストにやられてしまったんです」

「そうか……でもダメだ。俺の家にはお前まで養える金はない」

じゃあなんで腹ペコシスターさんはどうにかなるんだよと突っ込もうとしたがこの時会ってないのでやめた

「けど……けど……お願いします上条さん！もう頼れる人がいないんです。お願いします！」

そう言つて上条さんに泣きつく俺

「分かった、分かったから離れてくれ！」

「え？」

「お前の居候は認めよう！」

「マジですか？」

今度は嬉し泣きになる俺

「その代わりちゃんとここの掃除とかやってくださいよ！」

「ありがとう上条さん！」

この時、上条さんは知らなかった。これから居候者が二人に増える事を……！

「お前の奨学金少ないの？」

「レベル1だからね」

「マジかよ……不幸だあああああ……！！！！！！」

プロフィール（前書き）

言い忘れましたが、このとあるシリーズの世界では風紀委員に入る時、レベル4以上の能力者から推薦されると筆記試験などは免除され。正規の理由であればすぐに入る事ができます。ご都合主義です
がご了承を。後、ネタバレがあります

プロフィール

かんざきつばな
神崎翼

詳細

転生者。神様の手違いによって死んだ憐れな人

女子にしか見えない顔と体で今まで男と思われた事は一度もない。
転生前は普通の体だった

柵川中学校一年生で初春と同じクラスで初春の横の席。

風紀委員所属で所属先は第177支部。

表からは筋肉操作のレベル1だが実際は超能力なんてものではない。
能力については下記参照。因みに上条の幻想殺しでは打ち消せる。
ただし能力を使ってる途中に上条が右手で触れる前に神崎の蹴りが
飛んでくるが。初春達には子供の頃から鍛えていたということに
している。皆様間違いない疑っているが

元々自分の家があったが火事で全焼。上条のいえに居候する事になる。

能力

三十分という制限付きだが、ドラゴンボールの孫悟空と同等という程でもないが人間とはかけ離れた力を使用する事が可能。スーパーサイヤ人にも変身できるが、スーパーサイヤ人だと十五分。さらにスーパーサイヤ人2だと、7分しか変身できない。因みに普通の状態で能力を使うと気絶して三時間能力使用不可だが、スーパーサイヤ人2だと時間を切ると死ぬ。

かめはめ波

言わずとしれた有名な技。因みに神崎は恥ずかしという理由で稀にしかかめはめ波と言わない

残像拳

自分の像が映る程の速さで移動して後ろから殴りつける

元氣玉

言わずとしれた有名な技。世界中の人々から少しずつ元気を集め攻撃するが、強すぎるという理由で使う事はあまりない。そして地球そのものを破壊してしまう恐れがあるので使いたくもない

瞬間移動

気のある場所へ移動する。因みに気がないとそこに瞬間移動するのは不可。因みに空間移動テレポートではない

界王拳

体が赤くなり、強くなるが、体はすごくきつい。因みにこれを使っても通常の継続時間は同じ

その他も有るが代表的なのは上記のみ

その他も色々と使えるが後は、本編で

次はこの小説の神崎以外の主要人物

御坂美琴

とある科学の超電磁砲の主人公。常盤台中学の超電磁砲レベル5の第三位で強い。最初であったとき戦った結果に不満を抱いている

上条当麻

とある魔術の禁書目録の主人公。不幸体質だが、天然フラグメーカー。事あるごとに女性陣にフラグをたてる。どんな不思議な物や事でも打ち消せる幻想殺し（イマジンプレイカー）の持ち主で、ただいま禁書目録と神崎の居候代に苦労中

白石黒子

常盤台中学所属。レベル4の空間移動風紀委員所属で神崎と初春は同僚。御坂にゾッコンLOVE。まあつまり……言わないでおきます

初春飾利

柵川中学の一年生で神崎と同じクラス。レベル1の暖かい物を暖かいままにする。冷たい物を冷たいままにする能力の持ち主。守護神

と呼ばれておりパソコンなどセキュリティの天才。風紀委員所属
で神崎と白井と同僚。

佐天涙子

同じく柵川中学の一年生でレベルは0。都市伝説などが大好きであり、いろんな都市伝説を持ち込む。レベル0なので、能力者になる事に憧れている

プロフィール（後書き）

こんなもんですね。すみません！こんな中途半端な時期にこんな事書いて。次は本編で

超電磁砲の始まり

「じゃあー今日は風紀委員非番だぜ！」
ジャツジメント

ジャツジメント
風紀委員が休める日なんて風紀委員やつてる人間でこれ程嬉しい事
はない！

「あ！佐天と初春」

「神崎じゃん。今日は非番なの？」

「そつでございますよ」

ベンチで音楽聞いている佐天と初春を発見し、声をかける

「今からCD買いに行きたいんだけど……」

「すまん佐天。俺、今日白井に何か呼ばれてんだよ」

「えー神崎も？」

「ほら、佐天さん！神崎さんも行くって言ってますし、行きましょ
う！」

「ちよつ！初春！」

と言って佐天を連れていきなりダッシュでどつかへ行ってしまった。
何これ？成り行きが成り行きすぎて訳分からん。確か今日が原作介
入だよな……という事はあの電撃姫に会いに行くのか。ってか俺も

だけどな

「えーと、初春達の気は……あっちか」

集合場所を忘れてしまったので、初春達は何処へ行ったか、気を感じ追う。どうせ俺はど忘れする男ですよ！

「えーとここら辺か？」

初春が何処にいるか探していると気が止まったのでそこに急ぐと初春達の姿が

「あ！神崎さんここですよ」

白井たちが私はここにいるよアピールしてる

「あ！アンタは！」

「げ！お前は！」

そうだ、御坂によく分からないがライバル視されていた事を思い出した

「この前はよくも……今日こそ私と勝負しなさい！」

「お前はその事しか頭にねえーのか！」

「神崎さん、知り合いなんですか？」

「いや、ちょっとある時出会ったんだよ」

しどろもどろに答える俺

「今日こそは決着を……」

「お姉様！」

白井が御坂のヒートアップを止める

「ほら、初春と佐天さんが驚いてますわよ！」

その言葉で我に帰り

「まあいいわよ」

「ふう……」

初っ端からこれか……不幸だ

それから白井に俺の事を自己紹介されたりなんだりとして結局行く場所はゲームセンターになった

「立ち読みとかではなく、もう少しおことか……お花とか……」

「何処が私に似合ってるっていうのよ」

白井はゲーセンに行くという御坂の出した結果に不満らしい

「ねえ神崎これ見て！安そうなキャラだよね」

そう言つて佐天が見せてきたのはクレープ屋のチラシ。ああ、ゲコ太か

「こんなの買う人いない……いてっ！すみませんって御坂さん？」

「どうしたんですの？お姉様？クレープ屋さんにご興味が？それともこの「特典に興味があるのか？」……私のセリフ」

「なっ！そんなわけないじゃない！カエルよ！両生類よ！」

「じゃあそこについてるカエルのストラップは何でしょうか？御坂さん」

自分なりに高い声を出して見る。あんまし出ないな

「うっ！」

御坂が顔を紅くする

「神崎さん……」

「何だ？白井」

「貴方は本当に男なんですか？」

「へ？俺は男だと思つよな！な！佐天達！」

顔を紅くする御坂を除く三人が首を横に振つた

俺は男だぜ……

銀行強盗

「あーすっごい人」

「ホントだな」

「何でこんなに人が……」

てなわけでゲーセンという予定から広場のクレープ屋に変わりその広場には子供がたくさん

「休憩は一時間です！余り遠くまで行かないでください！」

「学園都市の見学会らしいな」

「タイミングが悪かったみたいですね」

クレープ屋にならびそんな会話をしていると……

「先にベンチを確保してまいりますわ」

「じゃあ私も、佐天さんたちの分お願いしますね」

「りょーかーい」

あれ？ここつて何かもう佐天が「えっ……あっ！」とか言って戸惑うんじゃないか？俺の思い違いか？

「えっと……順番変わります？」

「え！……別に私はクレープさえ買えばいいし……」

「ホントに強情な奴だな」

「うっさいわね！別にいい「やったーゲコ太ゲットー」……」

「「はあ……」」

俺と佐天は同時にため息をついた

「お待たせしましたーはい、どうぞ。最後の一個ですよ」

俺と佐天とで外の方はいまどうなの？と、聞かれたので答えてやっている、順番は早く来た

「ありがとう……っえ?!最後!」

その瞬間、最後のゲコ太が無くなった事に御坂が倒れて泣いているのか？

「あの一良かったらこれ」

佐天がゲコ太ストラップをあげようとすると御坂が振り向いて

「ホント？ホントにいいの？ありがとうー!!!」

その喜び方は最早中学二年生ではないな

その後、俺がクレープを買って。気分好調の御坂に付いて行く俺と

佐天

「良かったですね、御坂さん」

食べている途中に初春が話出した。白井……お前のトッピング気持ち悪いぞ

「お嬢様イメージとは全く違ったけど、思ったよりずっと親しみやすくて」

「うーんどうなんだろうね」

「俺はあんまり親しめ「ますよねー神崎さん」はい。そうですね。ウイハルさん」

気のせいだと思っけど一瞬殺気が……気のせいだと願いたい！

「はいどうぞ」

「え？」

いきなり佐天に近づく御坂

「味見でしょ？さっきのお礼。一口どうぞ」

そう言って佐天にクレープを出す。そこまでゲコ太が嬉しかったのか？

「お姉様！お姉様は私というものがあひながら、さ、さ、さ、佐天さんと間接てきな……」

しかし白井が何か早口で話していて後半はもう聞き取れなかったが分かる。お前はレスだ

「あんたの友達には付いていけないかも」

「ついていかなくていいと思うよ佐天」

「ハハ……え？」

「うん？」

不意に初春が首を傾げる

「あそこの銀行なんですけど……何で昼間っから防犯シャッター閉めてるんでしょうか？」

その言葉に今までじゃれあってた白井達も振り向いた瞬間！

ドン！

いきなり防犯シャッターが爆発する！直ぐに白井はクレープをたべて

「初春！アンチスキル警備員に連絡と怪我人の有無を確認！急いでくださいな！
神崎さんは私と一緒にお願いします」

「はい！」

「やれやれ。俺今日非番だぜ……」

椅子から渋々立ち上がり、白井についていく

「黒子！」

その声から自分も戦線でやりたいらしいなと分かる

「いけませんわお姉様。学園都市の治安維持は私達ジャッジメント風紀委員仕事。今度こそお姉様は見ていてくださいませ」

初春はアンチスキル警備員に電話してる。すると煙の中から

「おい！グズグズするな！」

犯人らしき人物が三人出てくる

「行きますわよ！神崎さん！」

「りょーかい！」

白井が俺の手を掴みレポート空間移動した

「お待ちなさい！風紀委員ジャッジメントですの！器物破損及び強盗の現行犯で拘束します！」

その姿に某然として笑い出す三人組

「おら、お嬢ちゃん達。怪我しちゃうぜ！」

お嬢ちゃん達？

「そういう三下のセリフ」「三倍界王拳!」「うっ!」「……何かデジヤヴですの」

白井が倒す前に俺がぶっ潰した

「デブは黙って寝てる。おい!俺は男だ!」

「なっ!てめえ女じゃねえのか!じゃあ手加減なしでやれるな」

「黙れこのカスが!」

そう言っただけで走ろうとすると……

「待ってください神崎さん!」

白井が止めた

「何だよ白井」

「ここで私の出番がないと風紀委員ジャッジメントとして情けないので私がやってもよろしいでしょうか?」

「別にいいぜ」

そう言っただけで白井に前を譲る

するとリーダー的な人間が

「てめえら……聞いてたら調子乗りやがって。ガキは黙って眠ってる!」

そう言いながら手から炎を出して来た

「パイロキネシスト発火能力者……」

そう呟いた瞬間逃げる白井

いや、白井は逃げたんじゃねえ！

「逃がすかよ！」

手から出した炎を白井の所へ投げる

「誰が逃げるんですの？」

「消えた！」

足で発火能力者の頭を蹴る白井。倒れた発火能力者の周りに釘を指す。

「空間移動能力者（テレポーター！）」

「これ以上抵抗するなら次はこれを体内に刺しこみますわよ」

釘を見せながら言う白井に諦めたらしい。そのままうつ伏せになった

と、その瞬間！

「何だテメエ！離せよ！」

もう一人の犯罪者から子供を連れていかれそうになってる所を佐天
が守っていた

「ダメー！」

「クツソオ！」

犯罪者が佐天と子供を蹴飛ばして車に入った

「なっ！」

俺の中で何かがキレた

「白井！」

「黒子！」

「ここからは私の個人的な喧嘩だから悪いけど出て出させてもらっわ
よー！」

「ジャケット風紀委員だけど……あいつだけは許せねえ！」

「あーあ」

白井がやっちゃったって顔をしてため息をつく

車が走り出した！

御坂は手に電気を溜めて超電磁砲レールガンを出そうと俺は手を前に出してそ
のまま腰の脇に移す

「ハアアアアアア」

「か……め……は……め……」

どちらも力を溜めて

「はっ！」

「波————！！！！！」

御坂は超電磁砲レールガン俺はかめはめ波を繰り出す

「うわぁ！」

車は急ブレーキをかけようとするが最早手遅れ

車に直撃した

「うわぁ……」

「凄い」

「思い出した！風紀委員ジャッジメントには二十人という不良の固まりを数秒で倒す最強の男の娘がいる！そしてそいつの異名は「宇宙能力コスモパワー」って」

コスモパワーって……もつとマシな名前考えるよ

しばらくして警備員^{アンチスキル}到着

「アンタ」

「何だよ？」

御坂が話しかけて来た

「本当のレベルは？」

「1だが」

「嘘よ！なんで私みたいな技が使えるなんてせめてレベル4以上よ
！」

「そう言われてもな。書庫^{バンク}で調べてみるよ。レベル1だぞ」

「……まあいいわ。後で黒子に伝えておくから」

そう言つて佐天のいるベンチに向かった。何が言いたかつたんだ？

「神崎さん？貴方、何者ですか？」

次は白井だ

「俺は人間だ」

「下手したらあの攻撃はお姉様の超電磁砲レールガンより強いですよ」

「そうかい」

「まあいいですよ。後でお聞きしますし。それよりこれ」

「え？何々？」

始末書始末書始末書始末書……

「これ全部俺の？」

「そうですね。交通についての始末書。などなどまあその他もろもろですわね」

「待て！だったら御坂も」

「お姉様には後でお渡しします」

さてこの時、俺の宿主がよく言う言葉を借りて一言

「不公だあああああああ!!!!!!」

その声は学園都市全体に響き渡った

上条さんと卵

佐天と初春と出会って一週間。俺は……

「いや〜良かった良かった。今日はお前がいるおかげで卵パックが二パック買えるぜ」

「そりゃどうも」

上条さんと卵パックを買いに行っていました、聞くところによると

「学生の命は卵だ！卵がなくて学生とはいいい度胸だぜ！」

との事。まあそんな訳で一週間前の始末書地獄の疲れが残っている中、買いに行った訳だ

しかしそんな平和な時間も束の間。中々通り過ぎない台風が現れた！

「見つけたわよアンタ達！」

「「へ？」」

振りかえるとそこには恒例の電撃姫が現れた

「今日こそ逃がさないんだから！」

電撃をはなってくる瞬間！

「逃げるぞ神崎！」

「へ？了解！」

「あ！待てコラ！」

上条さん&俺VSビリビリの鬼ごっこが始まった

必死に逃げる俺達。後ろには鬼がいる

「おっと！」

息が乱れる中、上条さんの靴が脱げる！

「神崎先に行け！」

「嫌です！その路地裏ならいけるかも！」

そう言つて上条さんを引つ張りながら路地裏に突入！だがそこは……

「行き止まり……」

「ハアハア。もう逃がさないわよ！」

「待ってくれ！俺たちは」

「問答無用！」

電撃を放ってくる瞬間！上条さんは右手を前に出し俺は御坂の後ろにテレポートした

バーン

そんな音が路地裏に響いた

数分後俺は上条さんと走っていた

「何とか助かりましたね！」

「ああ、一時はどうなるかとおもったぜ。もうセールスが始まっちゃまう！急ぐぞ神崎！」

「了解！急ぎましょー！」

卵のため全力疾走（俺は能力を使ってない）ダッシュする二人だった

「くそっ！もう始まってやがる！」

俺達の全力疾走でもバーゲンは時間というものに縛られているので始まる時間が遅くなる事はありえない。もうちよっと時間に縛られる事なくバーゲンをやってもらいたいものだ

「どけよ！」

「何してんだよ！」

中では能力を使い何がなんでも手に入れてやるという人間が多数！最早手に入れるのは無能力者じゃ無理だな

「もうダメじゃないんですか？」

そう言うと、上条さんは笑ながら

「本当にそう思っているのか？だったらその幻想をぶっ殺してやるぜ！この右手がある限り俺は能力者とも対峙できる！」

「そうかその手がありましたね！」

「ああ！この手は俺は不幸だけど、こんな幸運がある！」

グッとサムズアップをして

「だからやっつけてやるう！無能力者は買えないっていう幻想をぶち殺してやるう！」

「はい！」

「よし！突入だ！」

そうして最早生き地獄と言っても過言ではないバーゲンに突入した

「じゃあ俺はここで右から行く。お前は左だ。いいな？」

「了解しました！」

何か燃えてくるぜ！

「ウオオオオオオオオ！」

全力で突っ込む俺達！ここでは力を使っではいけない！自分の力で手に入れ……

「神崎！何があっても一パツクは手に入れる！」

ない！

「うおりゃ！界王拳！」

「ぐふっ！」

十人ほどがノックアウト

「てめえ！俺の炎に叶う訳……あれ？いな」「こっちだよ！」「グッ！」
もうゴールは目の前！行くぜ！

「はっ！」

気合で前にいる奴を吹き飛ばす

「取った！」

卵を掲げ勇者のように振る舞う俺

「やったな神崎！」

「はい！上条さんも！」

上条さんも卵を持って歩いてくるだがそのとき！

「うわっ！」

上条さんが倒れた相手につまづいて

「上条さん！寄りかからない……」

やば！能力の使い過ぎで力が余り出せな……

グシヤ

数分後、俺たちはその店にブラックリストに乗せられ、卵代を弁償してバーゲンを後にした……

「はあ……不幸だ」

溜息と一緒にその言葉が出るのはもう不幸な人間なのかな！

……泣きたい

学舎の園

雨が降る今日この頃、俺はバスに揺れていた。何故？こつちが聞きたい。何しろ俺は初春と白井に昨日の風紀委員で

『明日、学舎の園に来てもいいですわよ』

『本当ですか！白井さん！』

『ええ明日は風紀委員も非番ですし、なにより初春が行きたいと言っていたでしょう』

『やった〜憧れの学舎の園に……』

『ただし！』

『ただし？』

『神崎さんも連れて行ってくださいな』

『え？何で俺が付き合わなきゃいかん！』

『お姉様が言っただけなんです。アイツを連れてこないと佐天さんと初春さんは悪いけど……と申しておられましたので』

『くっ！あの電撃姫が！』

『神崎さん！お願いします！』

『うっ！分かったよ。行ってやるから』

『本当ですか！ありがとうございます！』

……てな感じの実に身勝手な理由&初春の上目遣いにやられて行く事になってしまった

初春は目を輝かせて、佐天は……疲れた〜みたいな顔をしてるが内心は違いそうだな。楽しみにしてそうだ。……俺も楽しみにさせてくれ

「楽しみですね〜学舎の園！」

「て、言ってもさ〜それってただ女子校が集まってるだけじゃないの？」

「そう！佐天の言う通りだ！集まってるだけ。行く必要がない！しかも俺は男だぞ！」

何でそんな女子しかないような場所で俺がいなきゃならん！

「その集まってる学校が普通じゃないんじゃないんですか！常盤台中学は勿論、どれも名高いお嬢様学校！」

「そりゃそうだけでも……」

おお！初春が眩しすぎて直視出来ません！

「今日は白井さんの招待のお陰で入れますけどそうじゃなかったら

私達庶民は一生縁がない場所なんですよ〜！」

「縁がなくて結構！」

「いや神崎さん！人生経験でこれは大切な事ですよ！」

ちよっ！初春が何か……いつもと違う

「卑屈だな〜初春は大体さ〜」

とか何とか言って反論しようとする、途中から話を放置していた初春は佐天のバツクから何かよく分からんパンフレットのようなものをだし言った

「これって……なーんだ、佐天さんだって今日行くケーキ屋さんチエックしてあるじゃないですか」

そう初春が言うと、佐天が顔を紅くして暫くしてからこのチエックしてあるケーキ屋について講義し始めた。やっぱり楽しみだったんだな

「……だから！」

やっと早口での佐天講義が終わる。結構面白かったぞ。その慌てぶり

「佐天さんって意外とミーハーなんですね」

「いや、意地とかそういうもんじゃね？」

また顔が紅くなりそうになったその時

『次は〽学舎の園入り口〽学舎の園入り口〽』

「あっ！」

途端に停車ボタンを初春が押した

「あーバス予定より早く着いちゃったね」

「まだ雨が降っている中を渡っていくと風邪をひきかねんな」

バスが到着しても雨はいまだにやまなかったのだが初春は余裕で

「大丈夫ですよ〽3、2、1」

とカウントダウンすると急に雨が止んだ

「おい、初春。これってお前の能力なのか？」

だとしたらレベル5確定だな

「違いますよ神崎さん！これは演算によって確定された未来の事象を読み上げているだけです！」

「あっ！そうなの？」

「そうですよ！」

「まあまあ初春、怒らない怒らない」

「え？怒ってませんか？」

いや、今は怒ってるようにしか見えなかった

「まあいいや。さっさと行かないと、集合場所に遅れちゃうよ？」

「あ、そうだった。三時からだったっけ？」

「じゃあ、早く行かないといけませんね」

ますます目を明るくさせながら先頭を歩く初春に俺はついていった

学舎の園（後書き）

変な終わり方でしたね。すみません！

常盤台制服の佐天と……（前書き）

今回短いです。

常盤台制服の佐天と……

「常盤台中学一年の白井黒子された初春飾理と」

「佐天涙子と」

「神崎翼です」

ただいま、学舎の園入り口で学舎の園に入るため招待状を警備員？に見せている。モノレールにも乗らないのに、このゴージャスな駅のような感じた。一言で言うと………どうやっても一言で表せないです！

「はい、結構です」

警備員がそう言うと改札が開いた。そこを通過して門のような感じの場所をくぐると……

「「うわぁ………」」

佐天と初春が感嘆の声をあげてそして手を合わせた

「佐天もなんだかんだで来たかったんじゃないか」

「そうですよー素直に言えばいいじゃないですか」

「うっ！私はチーズケーキが食べただけだし！」

素直じゃないな

「はあく何て可愛らしい街なんでしょう」

「横断歩道や信号まで外部と違うんだもん。凝ってるよねー」

「ホントだよなー」

歩きながら街中を見る

「ホントに他所の国に来たみたいですよ！」

「だねー」

「洋！！って感じだよな」

「ですねー」

そんなここの話をしているとなにやら視線を感じる。何でだ？

「あの……私達なにやら注目されてませんか？」

「え？ああこの格好じゃない？ここでは外の学校の生徒が珍しいんだよ」

「ああなるほど」

いや、俺に関しては……

「あの人女子なのに何でスカートじゃないの？」

「わかんないけど、スカートはかない学校もあるんじゃないの？」

「もしかしたら男だったりして」

「まっさかー！！！！」

そういう話はお互いに耳元で話せ！本人が傷つく！てかお前からお嬢様だろ！御坂以外にいたんだなそういう奴

「あ！やば！もう時間だよ！」

「本当だ！」

「ほら急ご！」

そう言って走り出した佐天

盛大に

かっこ悪く

水たまりに

転ぼうとしたその時！

「おい！俺を押し……」

バシヤン

「お二方、どうしたんですの？」

「いや、ちょっと、水溜りに……ね、神崎」

常盤台には白井と御坂がいた。

「来たわね！私と勝負！つて……え？」

「不幸だ……」

俺はワイシャツが、佐天はスカートがびしょ濡れだった

「俺を押すとは……」

「だからゴメンって」

酷い写真(前書き)

今回原作通りです。だから面白くないかもしれません。一応頑張りました

酷い写真

「アンタ……ハハハハアハアわ……私を殺す気?!」

「……」

「似合いですぎですの」

「……」

「佐天さんよりも……」

「似合ってる」

「……」

神様、この哀れな少年をどうか救ってやってください。できれば記憶も改変していただきますぐ!

「ハアハア……ふう。汚れた物はクリーニングに出しといたから。帰りによ……寄ってね」

「御坂さん? もうやめませんか? 俺は俺じゃなくなりそうなんですけど」

御坂は未だに笑を堪えている。死ね! 氏ねじゃなくて死ね!……と
いうと死んでしまうので言いません(俺が!)

「面倒でしたら貴方方の寮まで届けさせますの」

「うわー流石常盤台」

「メイドさんですか！？メイドさんがやってくれるんですか?!」

「でも一番流石と言いたいのが……」

佐天の一言で四人が声を合わせて

「」「」「神崎(さん!)!!!!」「」「」

「……俺、もう帰るわ。迷惑だったね」

心に深い深い傷を負った俺

「ゴメンゴメンしっかし似合ってるよねー」

「やっぱり……ハハ」

「もう笑わないでくれ。頼むから。いや、マジで!」

「分かった分かったゴメンゴメン」

そんなやり取りしてる俺達に後ろにいる一人の少女に気づけなかった

「うーん。苺のクロスタータか？いやいや、モンテビアンコっていうのも。ハッ！このチョコラータっていうのも捨てがたい！」

「早く決めるよ初春」

「そんなに悩む事ですか？」

「只今ケーキ屋で食べるケーキを決めてないのは初春だけだ。因みに俺は御坂にケーキを二個奢られるという手で手を打った」

「まっ！まあ私はチーズケーキって決めてましたから」

「チーズケーキ好きだな」

「ここのは限定品だから！」

「そっつすか」

俺にはよく分からん

「早くしないと日が暮れちゃうわよ?」

ほんとうだ。早く決めなきゃ例えではなくなってしまっぞ

「ちょっと待ってください!」

そう言った時、初春の電話が鳴った

「……はい?……はい。はい」

全員が初春を見る。ってか「はい」だけで分かるのかよ!

ピッ

「呼び出しですの?」

「タイミングの悪いことこの上ないですわね」

「え?風紀委員?」

「そうですね。というか神崎さん。貴方も風紀委員ですわよね?」

「ハイ。行ってまいります」

チッ!上手くカモフラージュできたと思ったのに!

「初春さんの分テイクアウトしとくね」

「俺の分もよろしく。二つだぞ」

「ハイハイ。女装趣味の神崎さん」

「おい、俺にはそんな趣味は「行きますわよ！神崎さん！」……了解」

弁解出来なかった。まあこの服だし……ってダメだ！認めちゃダメなんだ！

「全く。せつかくの非番の土曜日だと言っのに……アタッ！」

「イタッ！」

「イテッ！」

風紀委員第177支部についた途端叩かれた

「到着早々ぼやけないの」

叩いた正体は固法美緯このりみい俺の上司に当たる人物だな

「あら？貴方はどうして常盤台の制服を？」

「いや、まあ色々あってですね。アハ、あははは」

笑って誤魔化そ

「？まあいいわ」

「で、呼び出した理由はなんですか？」

白井が上手く話をずらしてくれた。ありがとございます

「昨日の放課後から夜にかけて常盤台の生徒ばかりが六人。連続して襲われる事件があったの」

「え？」

白井と初春が顔を見合わせる

「しかも学舎の園の中で。常盤台中学にはレベル3以上の能力者しかない。それをいとも簡単に倒している事から……」

「相当の能力者って事ですか？」

白井が一番おいしい所を持って行ったな。流石はレベル4！……は関係ないか

「可能性が高いわね。ただ……能力は不明。被害者はスタンガンで昏倒させられているの」

「それで……意識を失った被害者は」

「写真があるけど……酷いよ。見るんだったら……覚悟しなさい」

パソコンを動かしながら鋭い目で話す固法先輩

「風紀委員に志願した以上。覚悟はできてますの」

「私もです」

「俺もだ」

それこそが風紀委員だからな

「そう……じゃあ」

パソコンをこちら側に移動させ見せられた画像は…

………これのどこがそこまで酷いんだ？いや、確かに嫌がらせだけでも（見た感想）

「男子には分からないですよ！この屈辱感が！」

おおー始めて男として認識された！大きな進歩だ！と、思った時

「みんな！佐天さんが！」

「え？」

突然現れた御坂が担いでいる人は……佐天涙子だった

……ちよつと怒ったね

眉毛事件の終焉（前書き）

今回長いし駄文です

後・・・系と書いてある所は読み取れなかった言葉だったので気にしないでください

眉毛事件の終焉

「常盤台狩り？そうか、うちの制服を着てたから」

佐天を寝かせるため、べつの部屋に来た

「具合はどうなんですか？」

「身体の方はたいしたことないって。ただ……」

沈黙が訪れる。何なんだこれ？

「犯人の目星はついているの？」

「まだですの。少々厄介な能力のようですね……」

「厄介な能力？」

「目に見えねえんだよ」

俺が口を挟む

「どづいつ事？」

「これを見てください」

その御坂の質問に答えたのが初春だった。DVDをパソコンに差し込むと

『本当ですわ！私にも見ていません！』

いきなり常盤台の生徒がアップで出て来たので驚いたぜ。これは…
…警備員との対談か？

『えっと……ですが監視カメラの映像ですと……』

『それでも！本当に見ていませんの！』

どうでもいいが何でこいつはいつもアップで映るんだよ。そう思った時、白井がパソコンを切った

「被害者には見えない犯人ねえ……」

御坂サン。白井に突っ込もうぜ

「最初は……操作系の能力者を疑ったのですが……」

またまた初春がパソコンを動かして

「姿を完全に消せる能力者は47人います。けど、その全員にアリバイがあつて……」

「つたく。そこで行き止まりな訳だ」

「それ以前に監視カメラには映っているんでしょう？……操作系とはちよつと違うんじゃないの？」

「そうなんですの」

その時、ふと窓をみるとハトが通った

「「あ、ハト」「」

「え？」

初春と、声が重なった

「白井さん、見なかつたんですか？」

「白井君、洞察力が足りないね」

「そんなもの、気づきませんでしたの。大体神崎さん。今は佐天さん達の事を考えているのですから」

「そうだったな、早く手がかりを見つけない「初春さん。ちょっと調べてもらいたいんだけど」「……とまで言わせるよ」

こういう事されると傷つくんだよ！確かに俺もやったけれども！

そんな俺の思いが届くはずもなく、初春がパソコンを動かすと一つの能力が出て来た

「ありました。能力名はダミーチェック。対象物を見ている認識そのものを阻害する能力です。該当する能力者は一名。関所中学校二年、重福省帆^{じゅうふくみほ}」

「こいつですわー！」

「おいおい、勝手に決めんなよ。こいつ、レベル2だぜ？自分の存

在を完全に消せるほどの能力者じゃねーだろ」

「確かに自分の存在を完全に消せるほどじゃないとデーターにありません」

「うーんいい線行ってると思ったんだけどな」

俺の記憶だと確かこいつが犯人なはずだ。俺は超電磁砲をそこまで覚えていないので、すっかり忘れていたがこいつが犯人だという事だけは思い出した。何故かなどは全く覚えてないが

と、その時

「うーん……私……」

佐天が起きた。だがその顔は誰もを笑わせる顔で……

「佐天さん?!」

「大丈夫か?!」

「あんまり無茶しない……で」

笑をこらえる俺たち。ダメだ笑っちゃダメだ!

「え?……あああああああああ!……!」

皆が笑い出す。それは佐天の眉毛がああ両津 吉みたいな眉毛をした佐天だった

「ななななななな」

「佐天さん。気を確かに……クツクツ」

「シヨックだよ。そりゃあ」

「ハハハハハ。傑作だよ佐天君！国民栄誉賞貰えるぞ！」

「うっさい！女男！」

「女男……」

ちよつと傷ついた

「せめて……このくらい前髪があれば隠せましたのに」

「前髪？」

佐天が写真をみると……

「あああああああ！！！！！！こいつだ！！」

本日二度目のああああああ！！！！！！です！

「貴方、犯人を見たんですの？！」

「はい……あの時……鏡の中に確かに」

ちよつと待て！あの時ってどの時だよ！

「鏡に監視カメラ……なるほど認識出来ないのは直接肉眼で見たものだけに限られているんだ」

「いやね！だから突っ込もうぜ御坂サン！貴方はどんなボケでもスルーできるんですか！よし、俺が突っ込もう！」

「それっついでい」「この眉毛の恨み！はらさねおくべきか！やるよ！初春！」「……」

「……はい？」

タイミングずれた！

「なんか………凄いな」

初春はパソコンを全て動かして何かしてる。何故何かだということ……俺にも分からないからだ！流石守護神

「こうでもしないとここにある端末じゃ、処理が追いつかないんです。それより学舎の園は177支部の管轄じゃないんですけど……大丈夫なんですか？」

「上からの許可、取り付けましたわ」

「ナイス白井！」

「よっしゃー初春！どーんとしてみようかー！」

「はいはい。ドーン」

ドーンと同時にEnterキーを押すと、どんどん監視カメラの映像が出て来た

「学舎の園の監視カメラ。全2458台接続を終えました」

「「「「「おお」」」」」

2458台つて……多！

「待ってるよー前髪女！必ず見つけ出してやるからなあ！」

写真に指差してなんになる

「約束のケーキ、忘れないでくださいね」

「3個でも4個でも、好きなだけ食べてよし！」

「わーい」

子供か、おまえは

「多すぎるわね」

「確かにな……」

「そうですね？」

「ええー大丈夫ですよー」

「太るぞ、お前」

という上の言葉を言うと、デリカシーがない!とか言われるので言いたくない

「ケーキの事じゃありませんよ」

「「え?」」

「そうだったの?」

流れからしてケーキだろ

「初春、エリアEとHとJとNは無視ですわ」

「え?あ、はい」

消されたエリアは黒くなった

「あの辺りは常盤台から一番遠い場所。ですからうちの生徒はほとんど行かないんですの」

「へえ」

「じゃあ人通りの多い所も後回しね」

「何でだ?」

「犯人の服装、学舎の園じゃかなり目立つんじゃない?」

その時、最初に学舎の園に来た時の会話を思い出す

「あ、確かに！」

「一目のある所じゃずっと能力を使っていると」

「多分ね。けど能力を永遠に使いつける事は出来ない」

「成る程、一目のつかない所で息をひそめている」

能力を永遠に使いつける事が出来んのは今の一方通行アクセラレータぐらいじゃね
ーの？

「という事は……」

どんどん黒く塗りつぶされて行くエリア

「ジャッジメント風紀委員だ。スタンガンなんか持って常盤台を狙うなんてなあ、レベルアップ幻想御手使い」

エリアAにそいつー重福省帆は隠れていた

「な……なんで風紀委員が幻想御手を知ってるの!」

「そんな事どうでもいいだろ。俺が知りたいのは……何処で取引したか……だ!」

「くっ!」

俺が拘束しようとする、姿を消した

「気で追いかけりゃすぐ見つけれるんだが……初春!」

『なんですか?』

「ナビを頼む」

『分かりました。ここから三十メートル先の交差点を右に行ってください』

「了解!」

鬼ごっこも面白い

「鬼ごっこは……終わりだ。重福省帆」

公園でついに鬼ごっこも終盤に入る

「どうして……何でダメーチェックが効かないの？」

「さあな。ただ一つ俺が言えることは……てめえは終わりだ」

前には俺と御坂。後ろには佐天と白井だ

「これだから常盤台の連中は！」

しかし重福は懲りずにスタンガンを俺に向けて来た。そっぴや俺も

この制服だったな

「危ない！」

「心配ご無用だ。俺には……」

バチツ！

「あれ？」

バチツ！

喰らわねえんだよ」

能力使用中の俺はスター状態のマリオより無敵だぜ

「御坂たのむは、俺は手加減できねえ」

「へ？了解」

御坂に頼むと重福を電撃で気絶させた

犯人をイスに横たわらせる

「さてと……どんな眉毛にしてあげましょう……か？」

重福の眉毛は……太かった

ちょうど重福は目覚めて

「おかしいでしょ……笑いなさいよ！」

「ハア？」

「笑えばいいわ！あの人みたいに！」

「あの人？」

そう言うと重福の回想シーンが始まったの要約すると……

重福は男と付き合っていたのだが眉毛が変という理由で男が別れ、常盤台の女子と付き合ったのでその常盤台の女子が憎いという理由で常盤台狩りを始めたらしい。俺、長文乙

「なによ……どうしたの？さあ！笑いなさいよ！」

「えっと、変じゃないよ。そのくらい……その……そう！ちょうどいいチャームポイントだって私はそれ好きだな」

その時、重福の頬が紅くなった。これは……まさか

「罪な女ですの」

「あ？さ……サテンサン聞いてらしたんですか？」

「ちよつと許さないよ」

「すみませんでした。こんな事もう聞きません」

「まあいいや。許してあげよう」

「あざーっす！」

元気良く挨拶。しかし……疲れた

「ただいま」

やっと帰ってこれた

「よう、帰って来たか……っておい！その服！ビリビリの……」

「へ？」

「あああああああああ！……！！！」

常盤台の制服のまんまだった！

「上条さん！これには誤解が！」

「神崎さん！分かっています。上条さんは秘密はきちんと守りますから。女装趣味なんて事もきちんと守ります！」

「違います！聞いてくださいって！」

「俺、もう寝るわ！おやすみ！」

「上条さああああああん！！！！！！！！！」

誤解を解くのに三時間かかりました

幻想御手の取引（前書き）

今回はオリジナルストーリー

ギザです。自分で書いててちょっとづつだった

幻想御手の取引

「眠……」

深夜0時前、俺は第十学区にいた。流石に眠い。何故こんな所にいるかと言うと、この学区で幻想御手レベルアップの取引をされているらしいからだ。流石に中学一年生なのでまだ眠い。皆もう寝静まっているだろうな

「どこか……」

倉庫は三つある。ここの倉庫に幻想御手の取引がされているらしい。だが……

「何処にあるんだ？」

肝心の場所が分からなかった。しらみつぶしに探すか

そして最後の倉庫に入った時……そこに取引現場はあった

「おらおら！幻想御手欲しいんだろ？金、たんねえんだよな」

「そんな……ちゃんと足りてるはず」「うるせえ！」「ウワツ！」

蹴られる男、高校生ぐらいだろうか。少し様子を見てみるか

よう見してみると取引しようとしているやつが十人程。幻想御手を渡している野郎が三十人程か……集まってまで……バカらしいな

「ほらほら、嬢ちゃん。金、ねえのかよ？じゃあ体で稼ぐか？へへへ」

「ううう」

中には少女までいた。レベルに悲しんでる奴等か……

「泣いてちゃ……いけませんねえ！！」

男が少女を蹴った。くっ！我慢だ俺！幻想御手が出てくるまで

「ほらほら、死にたくなければ金だしな。それか身体か。まあ、どつちかっていうのは決まってるだろうな。ほら、レベル上げたいんだろ？なら頼るしかねえじゃねえか。幻想御手に」

「ううううや……やめて」

「やめて？誰がはい、そうですか！ってやめるバカいるか……よ！
そう言って蹴ろうとした瞬間！

「やめるよ」

「アア？」

自分の手が出ていた。もう我慢できねえ

「ああ、お前も幻想御手が欲しいのか」

「いらねーんだよ！このクソ野郎が！」

大声で叫ぶ。もう後戻りは出来ない、というかする気はない

「ほお……てめえ女のクセにいい度胸してんなあ。気に入った。てめえら……殺れ」

その声と同時に三十人程の不良が襲って来た

「めんどクセえ。一気に行く。ああ忘れてたわ。風紀委員だてめえらを拘束する」

「風紀委員ごときが調子のもつてんじゃねえよ！」

「こんの……クズ野郎が……！！！！！！」

思いっきり殴り倒す！

「こいつ……まぐれだよな」

「時間がねえんだ早いとこかたつけようぜ」

「俺達もやっつと幻想御手を手に入れたんだ！今ここで、渡せるかよ！」

くそつたれ。説得や脅しじゃ意味がねえ。あれをやるか

「ハア！」

髪の色が金色になり金色のオーラをまとう

「何だよ……こいつ」

「怯えんじゃねえ！ただ髪の色が変わっただけだ！何ともねえに決まって……」

「それはどうかな？」

足を蹴る！すると倉庫のはじまで吹っ飛んでいった。手加減はしたな。出来る限り

「兄貴！」

「テメエらもこいつのようになりたいか？」

「ふ……ふざけんじゃねえー！！！！」

「はぁ……あんまり風紀委員で怪我をさせると始末書やなんやらうるせーんだがしょうがねえな」

ほんの数秒後、そこには最早俺しか残っていなかった。後リーダー

「く……くんな！化け物！」

「化け物……人を平気で傷つけられるテメエの方が俺は化け物に見えるね」

「う……うるせえよ！ま……まさかてめえがあ……宇宙能力」

拳を握り締める。これは俺自身の力の拳。力もなにも使っていないその拳で

「くらえ三下が……！」

思いつきり殴りつける。相手さ吹っ飛んで気絶した

「おい、大丈夫か？……皆様寝てらっしゃる」

幻想御手について疲れたのであろう。

「まあいいか。ここにこいつらも縛り付けといたし。後は幻想御手だけか」

そう言って探してみると案外リーダーのポケットに入っていたので見つけ出すのが早かった

小さいiPodみたいな音楽機器。俺はこいつを……

グシヤ

勢いよく潰した。こいつがいつかAIMバーストを作るのか……

「ふう……ヤバイな上条さんに見つかるとヤバイ」

何か言われるかも

そう思っつて自分の服を脱ぎ、一人の少女に被せた

「俺は女子には優しいんだよ」

変態的な言葉を言い残して去る。もう会う事はないだろうな。会ったら返してもらおう

「今日は冷えるな」

そっついいながら、瞬間移動でその場を後にした

連続虚空爆破事件 1 (前書き)

本格的に幻想御手編に入ります。この前の話は所々書いて行きたい
と思います。

連続虚空爆破事件 1

「二週間前、初めて犠牲者が出たのを皮切りに」

眠い……

「クラヒトン連続虚空爆破事件はその威力及び範囲を拡大させています」

ね……ねむい

「神崎さん……」

「場所も時間も関連性が見つけれられず、遺留品をサイコメトリーで調べましたが以前、てがかりは見つけられていません」

も……もうだめ……

「神崎さん！」

「はい！」

目の前には初春がいた

「今は重要な連続虚空爆破事件の話なんですからちゃんと話を聞いてください！」

「おお、そうだった」

状況説明が遅れたな、シャッジメント現在風紀委員第177支部で、多数の風紀委

員が集まり一週間前から犠牲者が出てる連続虚空爆破事件の会議中だ。てな訳で白井もいるのだが、俺が寝ているのにも気づかず話を聞いている。集中しているんだろうな

「次の犠牲者を出さないためにも、アンチスキル警備員と、協力して一層の警戒強化と事件解決に全力を」

ここで、固法先輩の話は終わり風紀委員の会議は終わった

「なかなか手掛かりが見つかりませんね」

「そうですね。分かったのはレベル4以上の能力者、だがその全員にアリバイがあるという事ぐらいですからね」

「まさに行き止まりだな」

「ええ、ですが必ず何処かにヒントがあるはずですよ。後、もうちょよっと。って感じですからね」

「ああ、そうだな」

「―――レベルアップ幻想御手か

「AIMなんかかんとかー」

柵川中学で朝っぱらから能力開発の授業、俺に能力開発なんていないだろうに。と、思いつつ、殆ど話を耳から耳へと流す

そんな時後ろから佐天がシャーペンで叩いて来た

（何だよ？）

（どうかしましたか？）

同時に初春も叩かれたらしいな

（帰りにセブンスミストに寄っていかない？）

（セブンスミストって……ああそこか）

学園都市に転生した初日にここは色々とあるよ！と、佐天に教えてもらったんだっけ？

（え？でも、風紀委員のお仕事が……）

（ちょっとぐらい大丈夫だって！パトロール中とか言っとけば）

（だめだよ佐天君。風紀委員は治安維持を守る義務がある。サボってはられない）

（少しぐらいいいじゃん！）

お前は新手の武装集団か

(いつもたまにしか仕事をしない神崎さんじゃ説得力ありませんよ。今回はそうはいかないんですよ。事件が事件ですから)

(そっか)

(ちょっと待て！なんで初春の話だと素直に受け入れるんだ！)

何でだ！俺なんか悪い事したか？！

(いや〜何かね)

(何かですよね)

「何かってなんだよ！」

そう言った瞬間視線がこちらに集まる、ヤバ

「神崎君」

「はい？」

「静かにしよーね？」

「了解つす！」

殺気が感じられたのは気のせいだろうか？気のせいだと僕は信じる！

「あー疲れた〜」

風紀委員が終わり家に到着。家では上条さんがテレビを見てた

「何見てるんですか？」

「ああ、神崎か。この前第十学区の倉庫で武装集団が拘束されてたんだってよ。何故かは話さないけどこんな事を言ってるぜ。ほら」

そう言うつからテレビを見るとこの前、蹴って気絶した武装集団のリーダーがいた

『いきなり黒髪の奴が黄色くなってめちゃくちゃ強くなったんだよ！きつとあいつはあの宇宙能力コスモパワーに違いねえ！本当なんだ！信じてくれよ！』

「ほら、な。そいつ、隣の土御門がいつてたぜ。そりゃ黄金の戦士だにゃーって」

「へ……へえ。そうなんですか」

流石に今、目の前にいますよ。とは言えまい

そんな時、電話が鳴った

確認すると佐天涙子だった。なんだろ？

「神崎だけど、何だよ？佐天」

『明日は風紀委員非番でしょ？初春と白井さんと御坂さん連れてセブンスミスト行かない？』

「いいんだが……初春と白井は行くのか？」

一応聞いておかないとな。何か言われると困る

『白井さんは分からないけど……初春は行ってくつて』

「了解。じゃあ行くわ。明日、セブンスミスト前で待ってる」

『分かった。じゃーねー』

そう言って電話を切った

「何だ、明日どっか行くのか？」

「はい。友達と遊びに」

「そうか、分かった」

そこで会話が途切れた

まあ明日セブンスミストで会うんだけどね。おれの記憶が合っていればの話だが。

明日か……

本格的に幻想御手編の始まりだな

連続虚空爆破事件2（前書き）

感想などよろしくお願いします！

連続虚空爆破事件2

「こつちこつちー」

「初春さんは見たいものある？」

「うーんはつきりとは決めてないんですけど」

翌日、俺はセブンイレ……ミストにいた。どうやら白井は支部に行つたようなので、来たのは俺と初春と

佐天、御坂との四人だ

「うーいーはーるーちよつとちよつとー」

お前は何処ぞの奥様かよ。と、突っ込みたくなる佐天の台詞だ

その声に待つて下さ〜いとか言つてかけてつた「御坂と二人……なので

「今日こそ決着をつけなさい！今回はまぐれじゃ行かないわよ！」

いきなり二人きりになるといつも勝負しなさい！だの何だのと最早戦う事しか考えられない戦闘民族になつてる。お前はその中でもプライドが高いから破壊王子にでもなれるんじゃないかねーの？王女かな

「待てよ、破壊王女御坂美琴。ここじゃ危険だぜ。ほかの人がいるしなお前が電撃を放つとこの店がどうなるか分から……あれ？」

御坂さんが電流をパチパチさせている。あれ？ちよつと俺、死亡フ

ラゲ？

「その御坂美琴の前の言葉は何なの……よー！……！！！！！！」

「おい！」

ヤバイ！ここで電撃をやられると困るんですけど！

一瞬だけ能力を解放させてバリアを張って電撃を吸収した。こう考えてみて見ると、最早悟空って何でもありじゃね？

「チツ！まあ電撃は軽くしといた方が助かって当然よね。うんうん」

「いや、全く助かって当然じゃないだろ！そしてさっきのチツてなんだよ！酷くね？一応俺主人公だぜ？そいつにチツて……」

微妙にメタ発言をしつつも、なんか納得できないような感じで歩き出すとパジャマ専門店？に初春達がいた

「御坂さん。何か探し物ありますか？」

「ちょうど私パジャマが欲しかったのよ！でもあんまりいいの見つかなくて」

そう言った時、一つのパジャマに御坂の目が止まったピンクの花柄のまさに小学生です！と、主張しているようなパジャマだ

同時に来た佐天に

「ねえねえこれすごく可愛く」ねえ、見てよ初春。このパジャマ。

こんな子供っぽい今時、着る人いないよね」「小学生の時くらいまではこういうのきてましたけど、流石に今は……」「……そうよね」、中学生にもなってこれはないわよねっうん。ないない」

最初と随分意見が変わってると思ったのは僕だけかな？

「あ、私。ちょっと水着見てきます」

「水着ならあつちにありましたよ」

「ホント？」

とか言ってることは水着店に行った。行動の早い奴

そう思っていると御坂が目に入った。あれ？やっぱりあのパジャマ気に入ったんだな。試着しようとしてるぞ。こいつ

「それっ！」

と言って試着室に行こうとしたとき、そこにある少年が出て来た

「何やってんだ？ビリビリ」

「へ？なななな何でアンタがこんなところにいるのよ！」

「あー！上条さん」

そう、登場したのは上条当麻である

「おっ！神崎じゃねーか。御坂とデートか？」

「んな訳ないじゃないですか上条さん。遊びに来てただけですよ」

「だよなー冗談、冗談」

笑いあつてる俺達に御坂の放電音が聞こえなかった

「あんた達、勝手に……」

そう言つて電撃を当てようとする瞬間、

「お兄ちゃん」

その声で電撃を出すのが抑えられる

「うん？あ！常盤台のお姉ちゃんとそのお供の人だ」

「お！あずにやんだ。どうしたんだ？」

因みにあずにやんというのはあだ名だ。決して本名じゃない！

「ああーカバンの。お兄ちゃんってアンタ！妹がいたの？」

「違う、違う。俺はこの子から洋服店を探してって言ったから……」
「まで案内して来たただけだ」

「あのね、私もTVの人みたいにおしゃれするんだもん」

初めに行つておこう俺はロリコンではない！

……が、可愛い！……！

流石あずにゃんだ！

「そうなんだ〜いまでも充分可愛いと思うわよ」

「短パンの誰かさんと違ってな」

「ちよつ上条さん！それ死亡フラ……」

最早手遅れだ。諦めよう。うん

「何よ！やる気？それならいつぞやの決着を今ここで

「お前さつきも言ってたじゃねーか。ビリビリ」

「アンタまでビリビリ言うな！」

おおー怖い怖い

「ええーお前の頭の中はそれしかないのかよ。はぁーだいたい、こんな人が多い場所で始めるつもりですか？」

流石上条さん！分かってますねー

「ねえねえお兄ちゃん。あっち見たい」

「お、分かった」

「じゃーねーお姉ちゃんとお供の人ー」

「じゃーねーあずにゃん」

「元気に手を振るあずにゃん。うん。良い子はこうでなくては！」

「てか、アンタ。いつも思っただけど……あずにゃんって何よ？」

「中の人の話だ！」

「は？」

「いやいや、こっちの話でございますよ。気にすんな」

「気にしたら終わりだぞ」

「？まあいいわ……ハア……」

御坂は大きなため息をついた。パジャマを見て

「だから俺には似合わないって！」

「絶対似合っつて。ほらほら」

「俺に女装趣味はねー！！」

その後、戻って来た佐天と共に服選びをしていると初春の電話が鳴った

「初春、携帯鳴ってねーか？」

「あ！ホントだ」

と言っつて電話に出るといきなり大声で

『初春！虚空爆破事件の続報ですの！』

こっからは声が小さくなつて聞こえなかつたので、よく分からなかつたが、白井が電話して来たのは分かつた

初春は電話を切つて真剣な表情で言った

「落ち着いて聞いてください。次の標的が分かりました！この店ですー！」

「え！なんですって！」

御坂、いくらなんでもその答えはベタ過ぎないか？

「神崎さんと御坂さんは避難誘導に協力してください」

「了解」

「分かった」

「佐天さんは避難を」

「……うん。分かった。初春達も気をつけてね」

よし！やるか！

『お客様にご案内を申し上げます。店内で電気系等の故障が発生して……』

アナウンスの声で中にいた人達が動き始める。俺は外からの誘導だ

もう、避難誘導は終わったそう思った時

「ビリビリと神崎！あの子見なかったか？」

「一緒じゃなかったんですか？」

「外にいなかったんだ。もしかしてまだ中に……」

「何やってんのよ!」

「お、おい!」

御坂が先に駆け出す。それを追いかけて俺たちも走った

来た時には、あずにゃんが初春に爆発物カエルのおもちゃを渡した

「初春!」

気づいた時にはもう遅い、初春があずにゃんを抱えて伏せる

「ちくしょう!」

俺は能力を解放した

こうなったら超電磁砲レールガンで！

そう言っつてメダルを出すが焦ったのがいけなかったのかそのメダルを落としてしまった

もう次のメダルを出す時間はない！

まさに絶体絶命！

上条 s i d e

やばい出遅れた！

これじゃあ右手が出せねえ！

もう走っても間に合いそうもない！

まさに絶体絶命！

神崎 side

どうする！爆弾を対処するには！

バリアは自分の身しか守れねえし。

こうなったら一か八かだ

気功波で爆風を……

飛ばす！

「はああああー！！！！！！！！！！」

その瞬間、爆音が響いた

連続虚空爆破事件2（後書き）

カバンの件は番外編にでも書きます

かき氷

「ああ〜眠い」

連続虚空爆破事件の後、奇跡的に爆風を飛ばせた後、上条さんにお前、何者なんだ？と、疑われたり何か御坂が介旅を殴ったりなんだからと何か御坂にアンタ本当に何者なの！などと拷問をされてバツドエンド……

な訳ではなく、何とか逃れてその数日後

いつもより静かなこの教室。初春が今日微熱で休みなので、そのせいか、佐天がずっとぼーっとしているのだ。まあ授業中だけだが（いつもの事か？）

現在、自分だけの現実だパーソナルリアリティの何だのと授業中、超能力なんて必要のない俺にこんな授業必要あるんですかと、聞くと。学園都市を追い出されかねない。なので、これからどうなるのかを思いだして、どんな原作介入をするかシュミレーションをしていると

「……神崎」

あれ？何か声が聞こえる

「神崎翼と佐天涙子！」

「はい！」

「何だか随分余裕有るな！。今のところ、簡単に説明してみる」

どうやら俺もぼーっとしてたみたいだな。ヤバイ

「えーっと、えーと」

困りながら俺と佐天はページをめくっている

キンコーンカーンコーン

「ああ、もういい。自分だけの現実について勉強しておくように。
はい、今日はここまで」

「え？？」

放課後居残り確定

「はあ」

放課後、佐天と共に居残って勉強している。しているのだが……

はい。正直言つて、全く分かりません！

佐天はまたもやぼーっとし、窓を眺めている。お気楽な奴。と思っ
ていると

「ねえ、神崎！初春に薬届けに行くの手伝ってくれない？」

「へ？ああ、いいけど」

「じゃあ早く行こう！人数多い方が盛り上がるし」

「病人の家で盛り上がるって……」

どうなんだか

そう言われるがまま佐天についてった

なんか近道できるらしいので公園を突っ切っていると

「あれ御坂さん達じゃない？」

「へ？あ。ホントだ」

かき氷を食べてる御坂と白井がいた

「御坂さーんと、白井さーん」

「あ！佐天さん！」

「よっ！」

「神崎もいるじゃない」

俺って何かおまけ見たいな感じなんだが……気のせいと信じたい。
マジで！

「美味しそうですね！」

とか言いながら、かき氷を見て次に俺の方をみた

おごって欲しいんですね、分かります

「ダメだ。今、俺は居候の身なので、節約しなければいけないのだ
！だから自分のだけ買う！」

そこで、じゃあ自分の分も使うなよ。という突っ込みはやめてね！

「あ、そうだったけ？そーいや、寮が燃えたんだっけ？」

「思い出させるんじゃないねえ」

あの発火能力者、もう一度殴りたい！思い出しただけで腹立つ！

「それ、莓味ですよね」

「うん。良かったら一口どうぞ?」

何時の間にかかき氷を買っていた佐天。早すぎない?

「いいんですか?」

そう言って口に運ぶとき、白井の顔がなんかリアルになっているのに俺以外だれも気づいてないらしい

そしてその後、白井に更なる悲劇が!

「お返しにレモン味も食べます?」

「ありがとう」

そう言っただけなら風紀委員じゃなさそうで実はなってますグランプリ
び跳ねる

これだけ見たら風紀委員じゃなさそうで実はなってますグランプリ
一位獲得だな

流石に気づいたのか二人は白井の方を向く

「な……な……なにをしてるんですの」

「食べ比べですけど」

軽く言った言葉が白井には重い言葉だったらしい

「た……た……食べ比……比」

「お前、今絶対に私もお姉様と間接キスがしたいのです！って考えてただろ」

「そんな事考える人なんて今、ここにいないと思いますけど」

「いや！自分自身がそうだから！」

三人は心の中で声を合わせた

「では、私と間接キ……もとい、食べ比べを」

「アンタ、私と同じ苺味じゃない」

「……」

その後、白井はずっと地面に頭を打っていました

「おーい大丈夫か、白井」

いまだに凹んでる白井を慰める俺、結構大変だ

「そついや、佐天さん。初春さんは一緒じゃないの？」

「今日、夏風邪で学校休んだんですよ。それでも私はこれから薬を届けに」

「かなり悪いの？」

「たいした事はないらしいんですけど。やっぱり心配ですしね」

「友達思いだな。佐天は」

薬を届けに行くなんて普通先生に言われるとかしなないと行かないぜ

「ありがと、神崎。あの、もし良かったら初春のお見舞いについて来てもらえますかね」

その言葉に一人は頷いた

もう一人は

「おーい白井」

まだ凹んでるままだ

お見舞い（前書き）

しばらくぶりです

更新を休んでました。すみません

更新速度は前より遅くなりますけど続けて行きますのでよろしくお
願いします

あつ、そう言えば連続虚空爆破事件の最後で上条さんが幻想殺しで
消さなかったのは主人公を活躍させたかったからです

上条さんファンのみさなんすみませんでした

お見舞い

「って事でお見舞いにきつたよー」

どんな事でだよ。

「」「おじゃまします」「」

「すみません。わざわざ」

皆様お久しぶりです。戻って参りました神崎翼でございます！

「いやいや気にすんなって」

「そろそろ神崎の言うとおり。ちょっとうごかないで」

まず、現状を説明しよう。気を取り戻した白井と御坂と佐天と共に、初春の寮に遊び……

ゲフンゲフン。

お見舞いに来た。

俺はテーブルに座り置いてあつたお茶を飲む

「37.3分……まあ微熱だけど今日は一日寝てる事。もうお腹だして寝ちゃダメだよ」

なんで佐天は初春が寝てる時、腹出して寝てる事知ってたんだ？

……

完璧ストーカーだな。

ストーカー認定おめでとございます!!

「おめでと佐天」

俺は満面の笑みで佐天の背中を叩く

「なにが!？」

「気にすんなって。白井も殆んど同じようなもんだ」

「なにがですか?」

「なんでもねえって」

そう言いながら終始笑顔でテーブルに戻る。

「変な神崎」

と言いながら佐天も座ろうとすると

「佐天さんが私のスカートめくってばっかりいるから冷えたんです
よ」

……

変態レベル上げよ

「いや……それはだつて親友として毎日ちゃんとパンツはいてるか気になるじゃないですか。そう思わない？神崎？」

「いやいやない絶対でない」

変態レベルまたまた上げよう。

……こりゃ少しでも道間違えたら、白井と同じ性格になりそうだな

……ヤバくね？

「ちゃんとはいてます！」

今度はベッドから起き上がったてまでの抗議

「分かったから。病人は寝て寝て」

「御坂の言う通りだ。ぶり返すぞ」

その言葉にしぶしぶ元の位置に戻った初春

「冷たいタオル、作ってきてあげるね」

佐天は今度こそベッドから降りて、台所に向かった

「あっそつだ白井さん」

「ん？」

お茶を飲みながら初春の方を見る

「虚空^{クラフトン}爆破事件の方。なにか進展はありましたか？」

「あるといえはある。ないといえはないですの」

「ちょっとまてお前ら。仮にも俺は風紀委員だぜ。その俺をスルーすんなよ」

「神崎さんは必要最低限の仕事もサボってる事があるので、白井さんに聞いた方がいいかと」

「……………すみませんでした。会話を続けてください」

俺って風紀委員でいいのかな？

いいて言つて！

「では、続きを……………分かったのはあの犯人の能力がレベル2という事だけ」

「けどあれは間違いなくレベル4クラス」

「それはつまり……………更に分からない事が増えたという進展ですか？」

「その通りだ」

「なんでアンタが締めくくるのよ」

「別にいいじゃん！俺だって風紀委員だよ！少しは意地張りたいわ

「！」

スルーしやがってよ！俺主人公だよ！

「そう言えば佐天さん。前に幻想御手とか言っレベルアップてなかったけ？」

「はい？」

台所でタオルの水を絞っていた佐天がこちらを向いた

「能力のレベルを上げる？」

白井がどっからどう見ても疑ったような目で佐天を見る

「いや、だから噂ですって。実態もよく分からない代物ですし」

「あ、俺も聞いた事ある。けど中身もバラバラなんだろう？学校で話題になっていたな。そついや」

あれだろ？iPodみたいな奴だろ？と、言つと俺の立場が崩れるので言わないでおく。

とつか言える訳がない

「そつそつ、神崎とおなじく、噂も中身もバラバラでホント都市伝説みたいなものですよ」

「そつかまあ、そんな都合のいい話はないかあ……」

「うーん」

白井が唸り声をあげた

「どつした？」

「実は書庫バンクに登録された能力のレベルと被害状況のくい違いのあるケース今回が初めてではありませんの」

「そついや、そつだつたな……確か……常盤台の眉毛野郎、銀行強盗のうぜえ能力者。そして俺の家を燃やしたクソ野郎など……数

えてみれば結構いるなあ」

「神崎、知ってたんですの」

「いや俺、仮にも風紀委員だからね！」

つてかさっきまで「神崎さん」って呼んでなかった？まあいいや

「それって……」

「レベルアップってマジもんなんですか？」

「なにか、他に知ってる事はない？」

「へ？ええつとホントか嘘か分からないんですけど、レベルアップ
ーを使った人達が掲示板に書き込みをしてるとか……」

「それどこの掲示板か分かる？」

おいおい、質問攻めつて……転校生かよおい

「ええ……ええつと……ええつと」

「これじゃないですか？」

まさに「天才は忘れた頃にやってくる」今までなにをしていたんだ
かノートパソコンを使ってそのサイトを出していた

「あっ！そこそこ！」

「お手柄ですわ！後はその素性や溜まり場を調べれば……」

「素性までは分かりませんでしたけど、溜まり場ならほら、このフ
アミレスに集まってるみたいですよ」

初春が指を指した所には『ジヨナGに集まるうぜ！』と書かれてあ
った。初春さん。お疲れです

それを見た途端、御坂は飛び出して

「ありがとう初春さん！行ってみるわ！あっお大事にね」

忙しい奴だな。そう思った途端に白井も

「お姉様！それはわたしの仕事ですの！お姉様！私の話を……」

「行ってらっしゃい」

「神崎はいいの？」

「別に、大丈夫だろ」

俺はマイペース主義者だ！と思つた途端

「ほら、神崎も行きますわよ」

「へ？ちよつ、まつ！」

テレポート
空間移動で連れていかれてしまった

「大変だね……神崎も」

「そうですね」

*
*
*

「ここね、じゃあ行きますか」

「またお姉様は」

「そうだ、そうだ！少し休ませろ！」

強制的に白井に連れて行かれてやっとジョナGに着いた……疲れた

「アンタと黒子は言ってる意味が違うから！ほら、アンタ達、風紀委員だから面がわれてるかもしれないでしょ」

「うう……でも」

「いいから！私に任せときなさいってそれじゃアンタ達ははなれた席から待機ね」

とか言っつて俺にカバンを持たせて走り去っていった。何故俺にカバン？

「なんなんでしょう。黒子はとっても不安ですの」

「大丈夫。俺も同じ心境だ」

「ほら、早く行くわよ！」

「ああ、まっってくださいですの！お姉様！」

「はあ……」

ため息をつきながら御坂と白井のもとへと急いだ

お見舞い（後書き）

感想、アドバイスなどは是非、是非お願いします！

デレデレールガン＝今の御坂美琴（前書き）

ダメだ！変なサブタイトルしか思いつかばねえ！

デレデレールガン＝今の御坂美琴

「レベルアップについてしりてえだ？」

みるからに不良っぽい顔の帽子を被ったモブaが言う。

ただいま俺は牛乳とアンパン（なんでこんなのがファミレスにあっ
たんだ？）を頼み、白井はごく普通のアイスフロートを頼んだ。

この前のように納豆をトッピングするかと思っただけど大丈夫だった
らしい。いやー良かった良かった。

「というか、神崎。なんで、牛乳とアンパンを？」

「いやいや、わかんねえの？白井クン。刑事ドラマで張り込みと言
えば、アンパンと牛乳じゃないか！」

こんなの誰もがわかるコトだよ！

だが、白井は変な顔で俺を見て

「私たちは風紀委員ですし、しかもこの学園都市は、警備員はいま
すけど、刑事なんていませんよ？」

「……………」

「……………」

話を戻そう、白井が変な顔で俺をまたもや見てくるが、本題はこっ
ちのはずなのでな。けっして、恥ずかしいとかじゃねえし！

さっきのモブaがさっきの言葉を向けたのはやはり、御坂サン。

「ネットでお兄さんのサイト見つけて。出来たら、私達にも教えてほしいなって。お願いこの通り！」

手を合わせて頼む姿は、いつものツンデレールガンとは見えない。いつもこんな感じでいればただの可愛い女の子だと思っただが、現実（まあ二次元だが）はそうはいかない。困った世界だな、なんて思っているとモブaは邪魔とでも言いたいような感じで帰れといやがった！

ダメじゃないかa！！御坂がデレデレールガンからツンデレールガンに戻っちゃうよ！

だが、流石デレデレールガン。動じないで

「そんな事言わないでえ」

もうこの人誰？みたいな感じだが、みんな大好き！御坂美琴ちゃんだから安心してね！！

「しつげえぞ、ガキはもうお眠の時間だろ」

そんな御坂の言葉をどうでもいいように、スルーして八工を追っ払う動作で、モブaは対応する。この人慣れているのか？ってかのままだと御坂さんは

「まずいですの。早くも頓挫の予感が……」

「ああ、デレデレールガンがツンデレールガンに戻るどころかデレがないツンデレールガンになっちまう感じだな」

「はあ？」

白井がまたまたまた変な顔で俺を見てくる。今の発言は自重します。スンマセン

だが、そんな俺達の予想はことごとく外れ、御坂は

「ええー私、そんな子どもじゃないよー？」

ゴン！

「おわっ！」

御坂のその言葉にいきなり白井が自分の頭をテーブルにぶつける。その姿はまさに会社の同僚と酒を飲みについて酔った勢いで「俺もダメだよお、部長に怒られちまったし、ああこんだからカミさんに逃げられちまうんだ。やっぱ俺は二次嫁しかいねえよお」って言いながら頭をぶつける三十代の人みたいだな、勿論容姿は完璧別だがな、そこんところは保証してやろう

そんな事を言ってるのかなり話は進んだらしい。御坂が泣いていた

「私もう……幻想御手しか頼れる物がないの。だから、ダメかな？」

将来ハゲになりそうな顔立ちのモブbは萌え萌えきゅん！てきな御坂の攻撃にbはベタ惚れ。白井はさらに激しく頭をうっている。もつと自分の頭を大事にしるよ？

「とにかく泣くな」

流石にbは慌てたのか、御坂に声をかける

aも流石に騒がれると面倒なのか立って御坂に話しかけた

「泣くなめんどくせえ。教えてやるよ」

そのとき、俺は俺見てしまった！御坂の笑みを！あの笑みを！

「ありがとうお兄さん！」

「じゃ、ちよつと外出るか」

「え？」

「こんなところで、バラせるかよ。行くぞ」

そう言っつてモブ三人＋御坂の計四人で外に出て行った

そっつえば白井は……

「……………」

「死んでるな」

ありがとう白井。お前の事は忘れないよ！

「よし、俺もいく」「あのーお客様？」「はい？」

行くうと思つたところ、会計の人に呼ばれた

「あのー会計は？」

「ああ、それならあそこで死んでるツインテールの子に払わせてください」

「分かりました」

うん？そうだ、あいつに払わせるなら……

「すみません。追加のお持ち帰りで冷凍食品

のこれとこれとこれとこれを第七学区の……寮の……号室に届けてくれませんか？」

「分かりました。会計は同じで？」

「はい。お願いします」

ゴメンよ白井。お前常盤台だし、俺、後輩だからたまにはおごることもあるだろ？俺の家そろそろインなんとかさんが来るから今うちに保存食を増やした方がいいと思つてな。まあ頼むぜ！

その言葉をテレパシーで送り（多分聞いてないと思う）いきなり瞬間移動で目の前に現れるのはドツキりもほどほどに言いたくなると思つので、気をさぐって御坂の方に急いだ

テレテレールガン＝今の御坂美琴（後書き）

感想、アドバイスなど宜しくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3371v/>

とある異世界からの転生者

2011年11月27日00時49分発行